

## 研究ノート

## 養浩館庭園の運営に対する提言

## Proposals for the management of Yokokan garden

小野 健吉

Kenkichi Ono

和歌山大学観光学部教授

キーワード：養浩館、福井市、大名庭園、庭園観光、トリップアドバイザー

Key Words : Yokokan villa, Fukui city, Daimyo garden, garden tourism, Trip Advisor

## Abstract :

Yokokan located at the city of Fukui is a villa with a pond garden built in the latter half of the 17<sup>th</sup> century by the Matsudaira family, the feudal lord of Fukui Domain. The space design is highly appreciated that the garden pond and the main building set just on its eastern shore are exquisitely integrated. Since the reconstruction of the building burnt down during the World War II was completed in 1993, the garden together with the building has been open to the public. In recent years, Yokokan attracts sixty to seventy thousand visitors annually, and it is one of the most popular tourist attractions of the city. This paper aimed to reveal the characteristics of Yokokan and its management problems through analyzing reviews posted on Trip Advisor and tourism related data offered by the city of Fukui. Subsequently, the following proposals for the better management of Yokokan are suggested.

- 1) Garden maintenance system should be more stabilized.
- 2) The number of access to the website of Yokokan should be increased to disseminate its attractiveness.
- 3) Events making the best use of the exquisitely-integrated design of building and garden should be planned and implemented, especially in the summer and winter seasons when visitors decrease.
- 4) The system for the residents of Fukui to participate in activities of Yokokan in various ways should be considered.
- 5) The total income should be increased by measures such as raising entrance fee to improve the garden and building maintenance.

## I. はじめに

大名庭園とは江戸時代に大名が江戸屋敷ならびに領国に造営した池泉回遊式の庭園で、本来的に広い面積を持ち、機能的には大名自身の娯楽とともに接遇の空間でもあったことから、現在においても観光資源としての利用に適した資質を備えている。筆者はこれまで、もともと江戸屋敷等に造営された大名庭園で東京都に所在する旧浜離宮庭園（中央区）・後樂園（文京区）・六義園（文京区）ならびに領国の城下町に造営された大名庭園の兼六園（金沢市）を対象に、現状の把握・分析等に基づいて、文化財となっているこれら大名庭園の活用と運営に関する研究（考察・提言）を行ってきた<sup>i</sup>。これらはいずれも規模が大きく、比較的早い時期から一般公開され、なおかつ多数の入園者を集める事例であった。

本稿で取り上げる福井市所在の養浩館は江戸時代の福井

藩主松平家の別邸で、それほど大規模ではないうえ、太平洋戦争で失われた建物が復元され庭園も整備されて往時の庭景を本格的に取り戻したのが1993年ということもあって、上述の事例などに比べると、その知名度は低い。しかしながら、修復整備された養浩館は建物が池に浮かぶような独特の景観を見せ、米国の日本庭園専門誌 *Sukiya living: the journal of Japanese gardening* での日本庭園ランキングでは上位にランクされるなど<sup>ii</sup>、文化観光資源としての魅力を十分に備えた庭園である。一方で、入園者数は年間6～7万人程度にとどまっている。入園者の属性に関する統計がないので、観光者等の市外からの来訪者と福井市民の内訳は不明であるが、早朝無料入園などを除けば福井市民の入園は必ずしも多くないものと見られる。このような状況から、より市民に親しまれ、観光者もオーバーキャパシティにならない範囲で多く訪れる、より

望ましい状況に転換していくためにはどのような方策が考えられるのか。このことが本研究の背景であり、また各種データの分析等に基づく方策の提言が本研究の目的でもある。

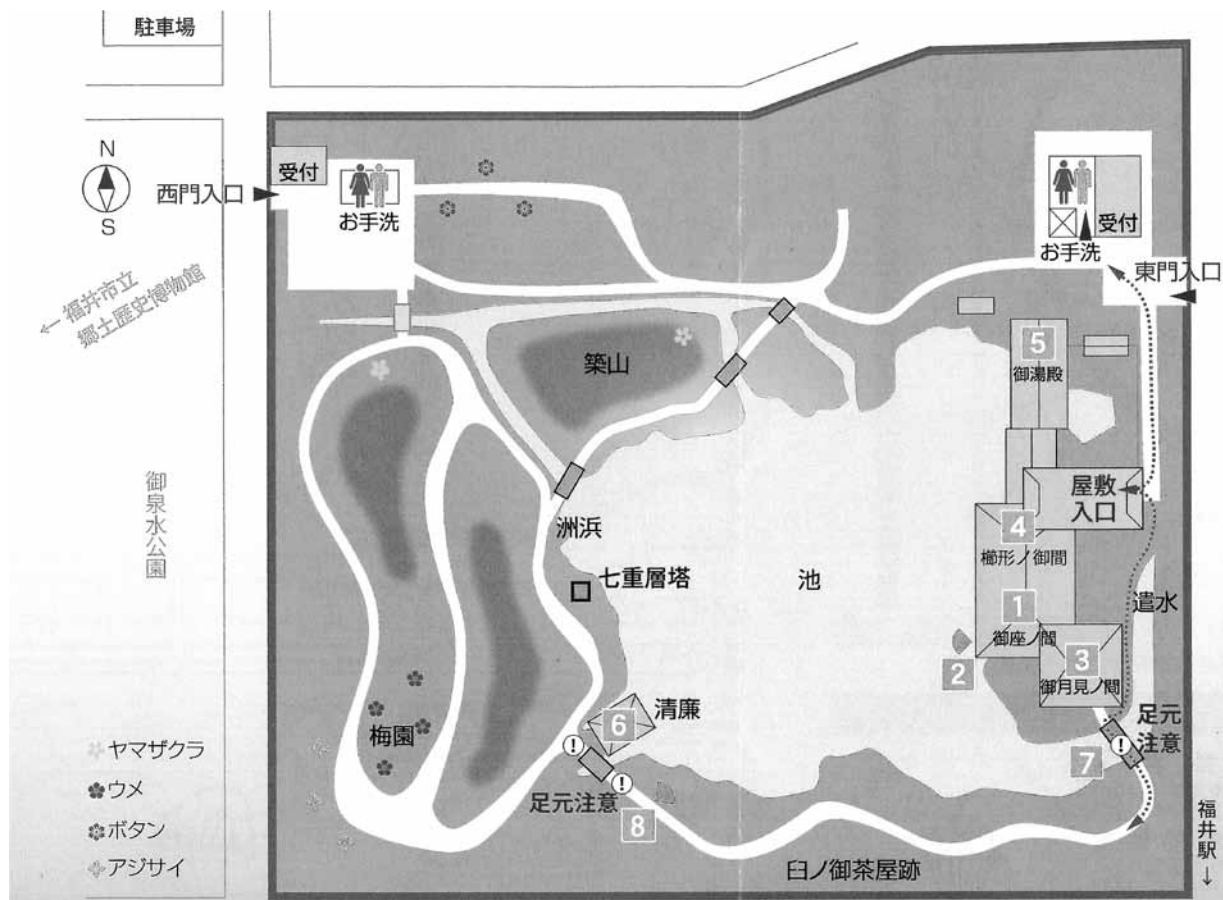
研究の方法としては、養浩館の歴史等について文献やウェブサイトから把握したうえで、2019年5月27日に養浩館にて現地調査を行なうとともに福井市商工労働部観光文化局文化振興課の田邊朋宏氏から聞き取り調査を行なった。さらに、同課提供の入園者数等に関する資料を把握・分析し、併せてインターネット上の旅行関連総合サイトであるトリップアドバイザーの口コミ投稿を記述事項から分析した。そのうえで、養浩館の現状での魅力と課題を抽出し、これらに基づいて今後の運営の在り方についての提言を示した。なお、筆者は上述の兼六園を対象に行なった研究でもトリップアドバイザーの口コミ投稿を参照したが、今回は、その際に行なった抽出的な取り扱いではなく、すべての投稿を分析の対象とした。

## Ⅱ. 養浩館<sup>iii</sup>

養浩館は、江戸時代に造営された福井藩主松平家の別邸である。三代忠昌（在位 1623～45）のときに福井城東方のこの地を藩邸とし、城下の上水道であった芝原用水を引き入れて「御泉水屋敷」としたと伝えられている。「御泉水屋

敷」の文献上の初見は明暦2年（1656）であるが、現在のような形に整備されたのは元禄年間（1688～1704）の7代藩主昌明（後に吉品と改名）の頃とされている。吉品は宝永5年（1708）に「御泉水屋敷」の西隣に「新御泉水屋敷」を設けて隠居所としたが、その没後には拡張部は廃されて元の「御泉水屋敷」の規模となる。以後、江戸時代末まで、茶会や饗宴の場あるいは藩主一族の住居などとして用いられた。

明治維新後、福井城が政府所有地となった後も、この「御泉水屋敷」は松平家の所有地として存続した。明治17年（1884）には幕末の福井藩主であった松平慶永（春嶽）によって「養浩館」と名付けられ、昭和初期まで越前松平家の迎賓等の場として用いられた<sup>iv</sup>。昭和20年（1945）の福井空襲で建物は焼失したものの、池水面の広い庭園はおおむね遺った。その後、道路拡張により敷地南部が削られるなどしたが、昭和57年（1982）には国の名勝に指定され、文化財庭園と位置付けられた。文政6年（1823）の「御泉水指図」に基づく建物の復元を含めた庭園修復は平成5年（1993）に完了し、以後、一般公開に供されている（図1）。なお、建物復元にあたって、発掘で確認された礎石等の遺構の上に直接建築するという手法が採られたことから、建物と庭園との高低関係が往時のままに保たれている。



< 1 御座ノ間 3 御月見ノ間 4 櫛形ノ御間 5 御湯殿 6 清廉 7 遣水と石橋 >

図1 養浩館平面図（「名勝 養浩館庭園（旧御泉水屋敷）」（福井市文化振興課）パンフレットから）

表 1 入園者数経年推移

(濃いアミカケは、入園者が年間最多の月、薄いアミカケは年間 2 位の月)

年度	入園者数計	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
2008	43,008	3,496	3,535	3,141	3,594	3,613	3,123	6,233	5,403	1,657	1,040	2,115	6,058
2009	50,011	5,248	5,390	4,449	3,651	3,944	5,010	5,561	7,195	2,361	1,463	1,938	3,801
2010	62,700	4,609	7,396	5,688	4,557	3,558	4,982	8,026	10,805	2,792	2,555	2,654	5,078
2011	71,244	4,894	7,165	7,446	6,771	5,349	7,954	8,573	9,240	2,035	2,787	2,911	6,119
2012	52,976	5,704	6,162	4,487	4,105	3,324	3,933	6,606	7,260	2,148	1,750	2,054	5,443
2013	55,197	5,402	5,799	4,962	3,823	3,082	3,830	6,240	8,780	2,175	2,191	2,658	6,255
2014	65,375	5,547	6,251	5,893	4,434	4,089	5,445	7,632	10,374	2,594	3,010	4,118	5,988
2015	72,330	6,760	6,325	6,174	4,905	4,571	5,594	10,466	11,464	3,167	2,918	2,938	7,048
2016	73,533	6,062	7,296	5,612	4,687	5,795	6,354	10,354	13,531	2,763	2,501	2,849	5,729
2017	61,133	5,133	6,263	5,349	3,447	3,889	4,886	7,190	10,816	3,375	2,208	1,692	6,885
2018	62,981	5,147	5,916	4,944	3,519	4,318	5,246	8,597	11,408	2,988	2,387	2,855	5,656

養浩館は、現在は福井県庁となっている福井城本丸から東に徒歩 5 分程度、福井駅からは 10 ～ 15 分程度と、アクセスしやすい立地に恵まれている。

### Ⅲ. 養浩館の運営ならびに入園者数等の現状

#### 1. 運営の現状

養浩館は、福井市が直営で運営している。福井市商工労働部観光文化局文化振興課が包括的運営を担い、隣接する市立郷土歴史博物館が養浩館の入園料徴収業務を外部委託している。また、植栽等に関する技術的庭園管理については 2019 年度まで嘱託職員が担当していたが、2020 年度以降は業務委託となる予定という。

休園日は年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）のみである。開園時間は、3 月 1 日～11 月 5 日が午前 9 時～午後 7 時、11 月 6 日～2 月末日が午前 9 時～午後 5 時であり、4 月 1 日～8 月 31 日は午前 5 時 30 分～8 時 45 分、9 月 1 日～10 月 31 日は午前 6 時～8 時 45 分の早朝開園も実施されている。養浩館の公開の特色は建物内も自由に見学できることであるが、無料の早朝開園の対象は庭園のみである。

入園料は、2020 年 3 月現在、一般 220 円（20 名以上の団体は 1 人 160 円）、70 歳以上・中学生以下ならびに身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の被交付者及びその付添者は無料である。また、福井市立郷土歴史博物館との共通券が一般 350 円（団体 260 円）となっており、同館と共通の年間パスは 1,500 円である。なお、家庭の日（毎月第 3 日曜日）・文化の日（11 月 3 日）・ふるさとの日（2 月 7 日）は無料公開日となっており、早朝開園も無料である。

#### 2. 統計からみた入園者数・イベント等の現状

統計資料のある 2008 年度以降の入園者数（月別内訳入り）の経年推移（表 1）を見ると 2009 年度以降は年間 5 万人を超え、2014～18 年度は 5 年度連続で 6・7 万人台となっている。これは福井市内の歴史文化系の観光資源としては、年間おおむね 10 万人程度の入場者のある一乗谷朝倉氏遺跡復原町並に次ぐものである<sup>9</sup>。月別入園者で見ると、2008 年度を

除いて最多入園者を記録しているのが 11 月で、2014 年度以降は各々 1 万人台から 1 万 3 千人台、それに続くのが 10 月であり、この庭園が秋の紅葉の名所と認識されていることが窺える。聞き取り調査によれば、11 月はバス旅行による団体客が多いとのことである。

2013 年度以降の早朝入園者数の経年推移（表 2）を見ると、2014～17 年度は 1,800 人代後半から 2,000 人代を保っている。2018 年度は 1,600 人代に減少しているが、この理由は不明である。早朝入園者は福井駅周辺等のホテルの宿泊者も一定数いると考えられるが、近隣住民のリピーターが多いものと推察される。月別早朝入園者数では、天候が安定する 5 月が多く、8 月・6 月がそれに続く。

養浩館では、春と秋に茶席を設けて有料（600 円）で抹

表 2 早朝入園者数経年推移

年度	入園者数計	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
2013	1,166	105	240	163	156	229	139	134
2014	2,025	196	276	303	264	365	276	345
2015	1,870	222	368	303	240	278	206	253
2016	1,894	212	342	246	269	357	232	236
2017	1,901	225	311	300	299	252	234	280
2018	1,631	209	307	281	206	255	197	176

表 3 お茶席利用者数経年推移

年度	利用者	春	秋	日数
2003	2,550			20
2004	2,524			67
2005	1,691			54
2006	1,675			52
2007	2,018			52
2008	898			39
2009	2,071			53
2010	2,197			52
2011	2,583			52
2012	1,987			51
2013	1,955			52
2014	2,280			51
2015	2,740			53
2016	2,572			53
2017	1,632	600	1,032	29
2018	1,981	701	1,280	38



茶等のサービスを実施し、年におおむね2,000人内外が利用している（表3）。実施期間は、年度によって異なるが、2017年度は春11日・秋18日の計29日、2018年度は春12日・秋26日の計38日実施され、利用者数はそれぞれ春秋あわせて1,632人（1日平均56.3人）と1981人（1日平均52.1人）であった。2016年度以前は年間50日程度実施していたが、お茶席担当団体からの要望と財政削減のため、実施日数を減らしている。

2017・18年度のイベント開催は表4のとおりである。具体的なイベントとしては、ライトアップ（通常入園料）、抹茶および煎茶の茶会（有料）、茶碗制作と茶席体験（有料）などで、参加者が多いのはライトアップされた夜の庭園を建物内から観賞できる光のイベントである。

また、ロケと前撮りによる施設利用件数推移（表5）を見ると、ロケについては年度ごとの変動が大きい一方、前撮りについては近年件数が増加し、ここ3年度は年間300件前後を数えている。施設利用料としては、ロケの場合はレポート等の単純な取材は無料、ドラマ・映画の場合は協議をもとに設定しており、前撮りは一部屋（3時間まで）1,500円＋消費税となっている。

#### Ⅳ．トリップアドバイザーの口コミ投稿での養浩館

##### 1. トリップアドバイザーの養浩館口コミ投稿の概要

「養浩館庭園」は、トリップアドバイザーへの口コミ投稿では、福井市の観光スポット135件のなかで一乗谷朝倉氏遺跡に次ぐ2位の位置を占める。投稿数は、2020年3月4日現在139件である<sup>vi</sup>。言語別の内訳は日本語117件、英語15件、中国語（繁体字）3件、ロシア語2件、朝鮮語1件、ドイツ語1件となっている。また、投稿された期間を見ると、日本語投稿が2009年9月～2020年1月、外国語投稿が2016年6月～2018年9月である。以下、日本語・外国語別に、評価・訪問季節・記述事項等を取りまとめた表6をもとにしながら、

表5 施設利用経年推移

年度	ロケ	前撮り
2012	4	13
2013	7	184
2014	14	164
2015	10	234
2016	4	298
2017	9	301
2018	15	283

表4 2017・2018年度実施イベント

2017

イベント	期 間	参加者数	備考
茶会（抹茶）4回	6/25（日）、7/16（日）、9/9（土）、12/10（日）	136	6/25（日）は3回開催
茶会（煎茶）	5/27（土）、9/23（土）、9/30（土）、10/1（日）	98	5/27（土）は2回開催
秋のライトアップ	9/29（金）～11月26日（日）	892	
庭カフェ	10/2（月）～11/30（木）	1,291	（江戸町カフェ）
浴衣	7/29（土）～8/13（日）	11	
計		2,428	

2018

イベント	期 間	参加者数	備考
香りとお茶	12/1（土）	12	
茶会（抹茶）	1/4（金）、3/2（土）	205	
茶会（煎茶）	3/24（日）	42	
庭カフェ	4/2（月）～4/20日（金） 平日のみ（15日間）	391	（江戸町カフェ）
浴衣で遊歩	7/21（土）～8/5（日）	18	
越前焼+抹茶碗	抹茶碗制作：9/9（日） 茶道体験：11/18（日）	44	2回の延べ人数
端唄三味線会	9/23（日・祝）	70	
秋のライトアップ	9/28（金）～11/25（日）	1,251	
		2,033	

表6 養浩館トリップアドバイザー口コミ評価

言語	評価					訪問季節*					主要事項記述				個別事項記述**						
	☆5	☆4	☆3	☆2	☆1	春	夏	秋	冬	不明	歴史	庭園	建物	静穏	建→庭	夜間照明	鯉	植栽	紅葉	茶	駅近
日本語	43	55	19	0	0	24	34	40	16	3	30	100	62	34	44	7	17	21	15	11	21
外国語	12	8	2	0	0	6	3	9	3	1	6	21	16	6	4	1	6	6	4	3	7
合計	55	63	21	0	0	30	37	49	19	4	36	121	78	40	48	8	23	27	19	14	28

\* 春：3～5月、夏：6～8月、秋：9～11月、冬：12～2月。

\*\*「建→庭」は「建物内から見た庭園（池）」についての記述、「植栽」には「紅葉」も含む。

口コミ投稿から養浩館の評価や特色等を以下に取りまとめておきたい。

## 2. 総合評価

トリップアドバイザーの口コミ投稿では、総合評価は5段階(☆5:とても良い、☆4:良い、☆3 普通、☆2:悪い、☆1:とても悪い)で投稿される。「養浩館庭園」の139件の総合評価を見ると、☆5が55件、☆4が63件、☆3が21件、☆2・☆1は共に0件で、平均すると☆4.24となる。日本語117件では、☆5が43件、☆4が55件、☆3が19件で、平均で☆4.21。外国語22件では、☆5が12件、☆4が8件、☆3が2件で、平均で☆4.45となる。養浩館のような日本の伝統を伝える文化観光資源では、外国語投稿(大半が外国人観光客による)のほうが高評価になるのは当然であるものの、日本語投稿(大半が日本人観光客による)もかなり高い総合評価を示していることがわかる。

## 3. 訪問季節

投稿者の訪問季節に着目すると、日本語・外国語を合わせた全体では、秋(9～11月)49件、夏(6～8月)37件、春(3～5月)30件、冬(12～2月)19件となり、ほかに不明が4件ある。日本語投稿では、秋・夏・春・冬の順に投稿数が多いのに対し、外国語では秋・春・夏・冬の順となる。いずれも秋の投稿が最も多く、これは入園者数自体が紅葉の季節となる10・11月に多いことと連動しているとみてよいだろう。

## 4. 投稿の記述

まず、日本語および英語の具体的な投稿をいくつか例示しておきたい。

- a) 「養浩館」の命名は松平春嶽(2019年12月5日投稿／2019年6月訪問): 江戸時代には「御泉水屋敷」と呼ばれ、福井藩主松平家の別邸でした。現在の規模の建物と回遊式林泉庭園が完成したのは1699年です。1884年、松平慶永(春嶽)によって、建物の呼称が「養浩館」と改称されました。回遊式庭園で、全国から奇石珍木が集められ、池には、多数の鯉が泳いでいます。空襲で建物が焼失しましたが、復元され、1993年に公開されたそうです。
- b) 池を中心とした大名庭園(2019年7月12日投稿／2019年6月訪問): 建物の中に入って畳に座り庭と池を眺めていると、ほんとうにのんびりすることができました。餌をもらえると思うのか、窓の下には鯉がいっぱい集まってきて、それを眺めているのも楽しかったです。建物内に板張りの部屋があって、何だろうと思ったら、蒸し風呂でした。
- c) 紅葉も黄葉も建物も皆、素晴らしい。(2017年11月27日投稿／2017年11月訪問): 福井市の中心部にある庭園です。紅葉シーズンが終わりかけていますが、市内の平地部のためか運よくピーク時に訪問することができました。限ら

れたスペースですが、庭園としては適当な大きさだと思います。紅葉、黄葉、建物、建物の中の調度品、池や小川が見事にマッチしています。市民の財産として大切にしてほしいです。

- d) 知名度低いし手狭だが隠れスポットです。(2016年12月20日投稿／2016年11月訪問): 地元では金沢の兼六園とよく引き合いにされることもありますが、観光地化されていない歴史の趣を感じさせてくれますね。特に雨や雪の日には意外と広い屋内と、そこからの池庭園はお見事。松平のお殿様になった気分にもなれますよ。年間通じていろんなシチュエーションで撮影も絵になります。人が少ないのは情緒的です。地元民からも是非おすすめ、どうぞお越しくださいませ。
- e) *Lovely stroll garden with villa* (2018年9月28日投稿／2017年11月訪問): A pleasant surprise in the city and a short walk from our hotel and the station. This small garden is a quiet place for a contemplative stroll around the pond. You can visit the feudal lord's (reconstructed) villa overlooking the pond and take tea if you wish, but we didn't feel that tea was necessary. The rooms in the villa are open to visitors. Many photos of the building present themselves from various points in the garden and through the windows from the inside of the villa out to the garden. The momiji were just coming into full color and the back garden was especially rich in shades of red and yellow. Be sure to ask about senior entrance fees. We were given free entry on the Sunday we visited.

- f) *Very nice gardens and loved the fish when fed* (2015年9月7日投稿／2015年9月訪問): Well worth a visit. Is the third best garden in Japan and a great deal of it is the lake. The fish are well used to being fed (you can buy food for them on entry) and it is the first time I have seen fish openly "begging" and when food is thrown in they go into a frenzy.

こうした投稿を全般的に見渡したうえで、記述された事項を大きく「歴史」「庭園」「建物」「静穏」に分類<sup>vii</sup>、これらの事項にすることがわずかでも書かれていればカウントすること(複数分類にカウント可)とした。例えば、上記のa)では歴史・庭園・建物、b)では庭園・建物・静穏をカウントしている。このような手法で集計すると、全体では、庭園121件、建物78件、静穏40件、歴史36件となった。庭園に関する記述が多いのは当然であり、なかでも外国語投稿では22件中21件で庭園に関する記述が見られた。また、庭園と建物が一体的な存在で、建物内にも入れる養浩館では、建物についての記述も半数を上回る78件の投稿で見られた。また、物的な構成要素ではないものの記述として「静穏」を記しているものが全体で30%近くに上る点は、養浩館の立地・形態的特色と入園者が比較的少ない現状を表していると言えよう。「歴史」について記述しているのは、日本語・外国語とも約4分の1

程度である。

さらに、記述事項を細かい個別内容で分類してみた。最も目立ったのは48件の投稿で見られた「建物内から見た庭園(池)」に関する記述である(上記ではb)・d)・e))。養浩館では、建物内から庭園を眺めるという本来の楽しみ方の追体験が入園者にとって特に印象的であることが窺える。また、池の鯉について記した投稿も23件あり(上記ではa)・b)・f))、とくに外国語投稿では22件中6件と日本語投稿よりも高い比率を示している。これも、池が建物に接しており、建物際まで鯉が集まって来るという養浩館の特色によるものである。庭園の植栽については27件の投稿で記述されており、うち19件は紅葉についての記述である<sup>viii)</sup>。茶席に関する記述が14件の投稿で見られるのは<sup>ix)</sup>、茶席が期間限定であることからすれば比較的多いと評価できよう。このほか、夜間照明(ライトアップ)に関する記述が8件、駅に近いという立地についての記述も28件あり<sup>x)</sup>、料金(の安さ)や開園時間(の長さ)、あるいはボランティアガイドの案内、郷土歴史博物館との共通チケットについての記述なども複数見られる。

## V. 養浩館の魅力と課題

本章では、前章までで述べてきたことをもとに養浩館の現状での魅力と課題を取りまとめておきたい。なお、魅力については主にトリップアドバイザーの口コミ投稿と筆者による現地調査をもとに整理し、課題については主に筆者による現地調査ならびに福井市提供のデータの分析および担当者からのヒヤリングをもとに整理した。

魅力としてまず挙げられるのは、池と復元建物が一体となって創出する「庭屋一如」の見事な空間構成であろう(図2)。復元建物であるがゆえに入園者が建物内を自由に見学でき(図3)、池を中心とした庭園の眺めを建物内から満喫できるところが養浩館の大きな魅力となっているのである(図4)。次にあげられるのは入園者が比較的少ないことによる静穏さであり、これは福井市自体がそれほど多くの観光者を集める都市ではないこと<sup>xi)</sup>と養浩館自体の知名度がそれほど高くはないこ

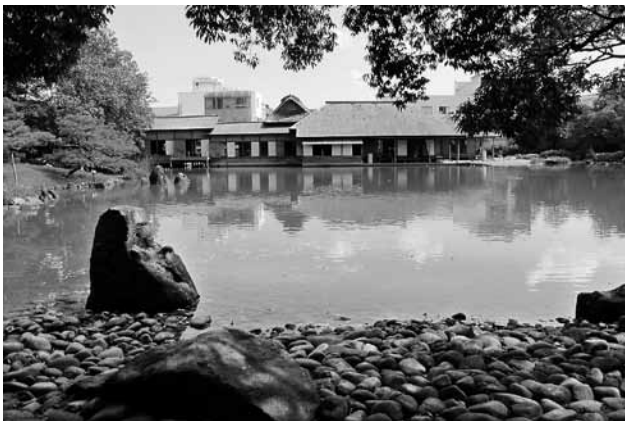


図2 養浩館の池と建物

とによると考えられる。さらに、庭園一般に共通する特質としての四季折々の景色の変化も大きな魅力であり(図5)、特に秋の紅葉の人气が高い。また、常時行っているものではないが、茶席やライトアップといったイベントも養浩館の魅力を高める要素となっている。このほか、入園料が低額であることや早朝無料入園、長い開園時間(冬季を除く)、駅から近いという立地のよさなども来訪者にとっては魅力となっている。

一方で、課題としては、以下のような点が挙げられる。まず、植栽管理等の技術的庭園管理体制である。文化財庭園においては、植栽や池水等の適切な管理により芸術的価値・観賞



図3 御月見の間内部



図4 櫛形の間から見た苑池



図5 初秋の苑池



的価値を担保することが重要となる。現状を見ると概ね良好に管理されているものの、嘱託職員による現在の体制は制度的に不安定であり、長期的な観点からは、庭園の魅力をより増進していけるような技術的庭園管理体制の充実が求められる。このことについては、次章でも述べるように、市としても認識をしており、2020年度からの体制の変更を計画している。次に、市街地に立地し、福井市が運営する国指定名勝としては入園者数がやや物足りないこと、ならびにこのことと低額の入園料が相まって入園料総収入が低いことである。養浩館は、その静穏さが入園者から高い評価を受けており、オーバーキャパシティとならないよう十分注意する必要があるが、そのうえで、現状の年間6～7万人よりはいくらかの上積みが期待されるところであり、福井市としてもそうした認識を持っている。団体客も多い春や秋の多客期はこれ以上の誘客は不要であろうが、入園者の少ない夏や冬には、建物内に入れる利点を活かした入園者数増加への取り組みが特に期待されるところである。入園料総収入については、入園者増加への取組み以上に、低額な入園料等の見直し（値上げ）による増収が検討されるべきであろう。さらに、福井市民との関係が必ずしも密接とは言えないことも課題として挙げられよう。

## VI. 今後の活用と運営に関する提言

前章に示した魅力と課題を踏まえながら、養浩館を確実に保存し良好な状態を保つとともに適切に活用していくための今後の運営の在り方等について、以下のとおり提言しておきたい。

① 技術的庭園管理体制の充実 養浩館では福井市文化振興課が包括的な運営を担当しており、そのなかで技術的庭園管理については嘱託職員による体制をとっている。前述したように、植栽管理等の技術的庭園管理の状態はおおむね良好であるものの、現状の嘱託職員による体制では良好な技術的庭園管理が安定的・長期的に担保されるとはいえず、何らかの改善が求められるところである。福井市文化振興課によれば、2020年度以降は技術的庭園管理を外部に業務委託する方針とのことであるが<sup>xiii</sup>、その際には文化財庭園の技術的庭園管理能力を条件とした委託とすることが必要であろう<sup>xiii</sup>。あるいは、兼六園のような正規の専門技術職員による直営方式も安定的で望ましいかたちかもしれない。また、イベントをはじめとした各種企画や広報を含む包括的運営については現状においても一定水準は保たれていると考えられるが、これ以上の積極的な展開となると組織体制の点からも厳しいところがある。

こうした状況のもとで、技術的庭園管理を含む包括的運営に指定管理者制度を導入することも選択肢のひとつであろう。指定管理者制度を導入して文化財庭園の包括的運営を積極的に展開している事例としては、京都市の名勝・無鄰菴がある<sup>xiv</sup>。ここでは、技術的庭園管理として樹木の剪定整枝や草地管理ならびに水の管理にくわえ敷地外の景観の見えが

りのコントロールなども行なう一方、茶会・着付け・庭の手入れ・盆栽・座学といった各種イベントの企画・実施やインターネットと紙媒体による定期的な情報発信、メンバーシップ制による交流の場の提供といった活用の増進に向けた多様な取り組みを行っており、結果として入園者数を増加させている。もちろん指定管理者制度には、経費面をはじめ指定管理者の能力や使命感をどう担保するかといった課題があり、一概に導入を進めることが望ましいというものでもないことは付記しておきたい。

② 情報伝達の工夫 入園者数が現在の数値にとどまっている理由は、トリップアドバイザーの口コミ投稿の評価の高さなどを考えると、庭園としての魅力の欠如ではなく、知名度の低さによるところが大きいと考えてよい。知名度を高めれば、ビジネス旅行やVFR<sup>xv</sup>に伴う兼観光の対象としてより多くの入園者を獲得することが可能と考えられる。

知名度を高めるには効果的な情報発信求められることは言うまでもない。近年の情報発信はインターネットによるところが大きい。養浩館の現在のウェブサイト<sup>xvi</sup>を見ると、利用案内やアクセスとともに歴史や現状での魅力も含む充実した情報が提供され、デザインも洗練されて見やすいものとなっており、スマートフォンにも対応している。多言語対応の点でも、英語・中国語（繁体字）・中国語（簡体字）・朝鮮語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ドイツ語の8言語対応と申し分ない。さらに、紹介動画も公開されている。このように優れたウェブサイトがすでに作成されている現状に鑑みると、課題はこのウェブサイトにはいかに多くのアクセスを得るかであろう。いくつかの手法が考えられるが、一乗谷朝倉氏遺跡をはじめとした福井市内の文化遺産や全国の他の大名庭園といった関連性のあるウェブサイトからのリンクを張ること、パンフレットや市の広報資料などにQRコードを付けることなどから着手することが考えられよう。

③ 庭屋一如を活かしたイベント すでに茶会やライトアップなどのイベントは行われているが、実施期間を見ると春や秋に行われているものが多い。しかし、入園者が少ない夏と冬にこそ魅力的なイベントを企画・実施することが求められるはずである。トリップアドバイザーの口コミ投稿でも多くみられたように、池を中心とする庭園と往時の姿に復元された建物が一体的に織りなす庭屋一如の見事な空間構成が養浩館の特色であり、さらに建物の内部が比較的自由に使えることと建物内からの庭園の眺めがその魅力となっている。建物内から見るライトアップされた庭園が高く評価されていることに鑑みれば、夏と冬のライトアップもぜひ取り組みたい企画である。また、庭園を眺めつつ屋内で各種演奏会を楽しむ催しなどを、夏や冬に可能な範囲で積極的に行なうことを提言しておきたい。

④ 市民とのより深い関係の構築 現在の養浩館は福井市民に親しまれていないわけではないが、例えば兼六園のような長い都市公園としての歴史を持つものではないため、広く

市民に愛着を持たれているとまでは言えない状況である。愛着を持つ市民は、早朝開園を利用する近隣住民や茶会等の関係者など、ある程度限定的であることは否めないのではなかろうか。文化財庭園を今後も適切に保存し活用していくにあたっては、幅広い市民とのより一層の関係の強化が必要である。そのためには、市民が養浩館と多様に関わる仕組みが不可欠であろう。例えば、市民がボランティアガイドとして養浩館に常駐すること<sup>xvii</sup>、実技研修を経たうえで剪定整枝等の庭園植栽管理の一端を担うこと、さらに伝統文化関連サークルなど各種市民活動の拠点とすることなどが考えられる。もちろん、季節折々に、あるいは来客などを案内して養浩館を訪れてもらうことも重要である。

⑤ 入園料の検討 現状の入園料 220 円は極めて低額である<sup>xviii</sup>。低料金で市民をはじめ多くの人に入園してもらいたいという行政サービス上の意図は理解できないわけではないが、文化財庭園の鑑賞の対価としてはふさわしいものとは言えないと思う。具体的な資料はないが、入園料徴収業務・技術的庭園管理業務等を含む包括的運営の経常支出にくわえ、建物と庭園において定期的に行う必要のある中規模修理・大規模修理の経費を考え合わせると、福井市の財政上の持ち出しは少なくないものと推察される。これを可能な範囲で入園料収入により補うことは当然考えるべきことで、適切な範囲内で入園者の増加を図ることとともに、入園料等の改定（値上げ）が求められよう。もちろん、入園料の値上げにより入園者数が減少するのではないかと懸念もあるが、従来入園料が低額であり、市外からの観光者等にとっては料金値上げが入園を妨げる要因とはなりにくいものとする。トリップアドバイザーの口コミ投稿で入園料に関するものは、低額であるとの印象を述べるものがほとんどで、それは入園者にとっては消極的な魅力の一つではあるが、低料金が入園の理由となっているわけではないことを示唆している。また、福井駅から近い立地であり、2023 年春に予定される新幹線福井開業も入園者増を後押しする要因となることも期待される。くわえて、値上げは必ずしも一律である必要はなく、福井市民の利用を促進する観点からは、福井市民の料金は現状に据え置き、市民以外の入園料を現状の 2 倍程度の 400 ～ 500 円に値上げするという方策も一案であろう。また、年間パスは現在の 1,500 円で据え置きつつ、その普及によりリピーターの拡大を図ることも考えたい。以上から、入園料の値上げが入園者数の減少には必ずしもつながらないものとする。さらに、収入増等の観点から、70 歳以上無料の措置については福井市民限定とすべきであろう。また、施設利用のうち「前撮り」は利用者の得る効用に比して 1,500 円という料金は低すぎ、大幅な値上げが妥当であろう<sup>xix</sup>。こうした入園料等の改定で増加した収入が養浩館の包括的運営の経費として充当されれば、その保存と活用の望ましいサイクルが生み出されるものとする。

## VII. おわりに

トリップアドバイザーの口コミ投稿の評価や米国の庭園専門誌のランキングを挙げるまでもなく、江戸時代から遺る庭園と復元された建物によって庭屋一如が再現された養浩館の空間構成は高く評価されている。本稿では、名勝に指定された文化財庭園として、また文化観光資源として、養浩館が適切かつ持続的に保存・活用されるための今後の運営について提言を行なった。具体化にあたっては種々の課題もあるだろうが、この提言が福井市当局の今後の取り組みの何らかの参考になれば幸いである。

本稿作成に当たり、福井市商工労働部観光文化局文化振興課から各種データの提供をいただいたことに感謝申し上げる。なお、本稿は平成 31 年度科学研究費基盤 C「我が国の庭園観光の適切かつ持続的推進に向けた研究」（代表者：小野健吉、課題番号 19K125470004）の成果の一部である。

## 注

- i 「東京都所管文化財庭園の観光を含めた活用の展望」『観光学』16 号 pp.25-38、和歌山大学観光学会、2017。「兼六園の活用と管理運営の展望」『観光学』22 号 pp.37-49、和歌山大学観光学会、2020。
- ii 2008 年～10 年に 3 位となり、その後も 2011・15 年の 4 位、2014・16 年の 5 位など、ランキング上位の常連となっている。
- iii 本章の記述は、『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』福井市、1989、ならびに「養浩館庭園-福井市-名勝養浩館庭園特設サイト「水の都」の「水の庭園」-福井藩主松平家の別邸」<http://www.fukuisan.jp/ja/yokokan/garden/outline.html>（2020 年 3 月 2 日最終閲覧）による。
- iv 『日本建築 養浩館』（田邊泰・1942）掲載の写真から当時の様子が窺える。
- v 一乗谷朝倉氏遺跡復原町並の各年度の入場者数は以下のとおりである。2014：103,410 人、2015：147,692 人、2016：119,742 人、2017：104,135 人、2018：93,318 人（『令和元年度 福井市統計書』<https://www.city.fukui.lg.jp/sisei/tokei/fukuisi/toukeisyo01.html#12>）。なお、一乗谷朝倉氏遺跡復原町並は一乗谷朝倉氏遺跡の一角にある有料区域であり、遺跡への来訪者はこの数値をかなり上回ると考えられる。なお、一乗谷朝倉氏遺跡の知名度向上については、定量的な確認はできないものの、ソフトバンクのテレビ CM が大きく向上したと言われている。
- vi トリップアドバイザーには 140 件と記載されるが、うち日本語の 1 件は同名の料亭に関する投稿であるので省く [https://www.tripadvisor.jp/Attraction\\_Review-g298110-d1534028-Reviews-Yokokan\\_Garden-Fukui\\_Fukui\\_Prefecture\\_Hokuriku\\_Chubu.html](https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g298110-d1534028-Reviews-Yokokan_Garden-Fukui_Fukui_Prefecture_Hokuriku_Chubu.html)（2020 年 3 月 2 日最終閲覧）
- vii 「歴史」は養浩館が江戸時代の福井藩主の別邸であることなどに少しでも触れているもの、「静穏」は「静か」「落ち着く」「癒される」といった記述が含まれるものをカウントした。
- viii 「紅葉の季節に訪れたい」といった願望を記したものも含む。
- ix 実際に茶席のサービスを受けたというものだけではない。
- x 他に「駅から近くない」と記述した投稿も複数ある。
- xi 近年の福井市の観光客入込状況は、2016 年度 3,986 千人・17 年度 3,875 千人・18 年度 4,188 千人となっている。（令和元年度版福井



市統計書 12—18 観光客入込状況: [https://www.city.fukui.lg.jp/sisei/tokei/fukuisi/toukeisyo01\\_d/fil/12.pdf](https://www.city.fukui.lg.jp/sisei/tokei/fukuisi/toukeisyo01_d/fil/12.pdf) 2020 年 3 月 17 日最終閲覧)

- xii 予定通り 2020 年度から委託としたことを確認した (2020 年 5 月)。
- xiii 文化庁の選定する選定保存技術保存団体で、文化財庭園の保存・維持管理等に関わってきた技術者等で構成される「文化財庭園保存技術者協議会」の会員が所属することを委託条件とすることも一案として考えられる。
- xiv 無鄰菴ウェブサイト (<https://murin-an.jp/>)。
- xv Visiting Friends and Relatives のこと。友人や親族の訪問を目的とした旅行。
- xvi 名勝 養浩館庭園 特設サイト (<http://www.fukuisan.jp/ja/yokokan/>)
- xvii 現在のところ養浩館にガイドは常駐しておらず、事前にネット予約を入れて依頼する方式を取っている。
- xviii 各地の文化財庭園の入園料を以下に例示する (カッコ内は管理者で、料金は大人の個人料金)。地方公共団体が管理するものは概ね低料金であることがわかる。なお、偕楽園 (茨城県) は 2019 年 11 月から従来の無料を有料 300 円とした。また、新宿御苑 (環境省) は 2019 年 3 月から従来の 200 円を 500 円に、無鄰菴 (京都市) は 2019 年 10 月から従来の 410 円を 600 円に引き上げた。  
兼六園 (石川県) 320 円／岡山後楽園 (岡山県) 410 円／栗林公園 (香川県) 410 円／偕楽園 (茨城県) 300 円／縮景園 (広島県) 260 円／玄宮園 (彦根市) 200 円 (彦根城との共通入場券は 800 円)／旧浜離宮庭園・小石川後楽園・六義園 (東京都) 300 円／旧芝離宮庭園・向島百花園 (東京都) 150 円／新宿御苑 (環境省) 500 円／無鄰菴 (京都市) 600 円／相楽園 (神戸市) 300 円／天赦園 (公益財団法人宇和島伊達文化保存会) 500 円／仙巖園 (株式会社島津興業) 1,000 円 (尚古集成館との共通券)／水前寺成趣園 (出水神社) 400 円／三溪園 (公益財団法人三溪園保勝会) 700 円／依水園 900 円 (公益財団法人名勝依水園・寧楽美術館)
- xix 結婚式の撮影等々の場として日本庭園は人気があるが、あまり表沙汰にならないものの、一般入園者からの苦情は少なくない。広島県が管理する縮景園のウェブサイトは、撮影について一般入園者の苦情を示しつつ、同園における撮影の取扱いについて詳しく示した数少ない事例である (<https://shukkeien.jp/guide/wedding/>)。料金を上げた場合においても、一般入園者の妨げにならないよう配慮することを利用者に周知徹底することが重要である。

受理日 2020 年 6 月 11 日